

# 「絵本表現法」による模索型モラトリアム青年のアイデンティティ確立過程

— K J法を用いた絵本の分析による「眼」と「手」の機能 —

春 日 菜穂美

## I 問題

これまで、日本における臨床心理学では事例研究が大変重視されてきた。しかし、対象者の査定、援助方法、分析方法が不明確なまま報告されることが少なくなかった。そこで、これらに関する問題点を指摘した上で、本研究の立場と独自性を明らかにしたい。

### 1. 分析方法：「過程記述型事例研究」へのK J法の適用

近年、社会学、文化人類学、教育学、看護学、心理学等の領域において、質的研究 (qualitative research) が注目され、広がりを見せている。この質的研究は、“扱われるデータも提示される結果も「質的」であるという点に大きな特徴がある” (能智, 2001)。そして、心理学において主流である演繹的方法 (既存の理論から仮説を導き、実証的データによって検証する) とは異なり、帰納的方法 (実証的データから新たなモデルを構築する) を用いる。

まず、この質的研究と事例研究との関係について、整理しておきたい。事例研究は、“一事例 (N=1) または少数事例 (small-N) について、各事例の個別性を尊重し、その個性を研究していく” (下山, 2001) ものである。それでは、質的研究かつ事例研究には、どのようなものがあるのだろうか。これには、下山 (2001) が臨床心理学における事例研究の種類としてあげている「会話記述型」「過程記述型」「ナラティブ記述型」「フィールド記述型」が該当すると考えられる。

このような質的事例研究は、個別性を重視する臨床心理学において、とりわけ重視されてきた。そのなかでも、特に日本においては、「過程記述型事例研究」(“援助構造内で臨床過程が

生じる事例を対象とする研究” ; 下山, 2001) が主流となっている。しかし、これに対応したモデル構成の方法が明確にされてこなかった。

そこで、「過程記述型事例研究」においても、データから理論 (モデル) 生成を行う手順が明確であるグラウンデッド・セオリー・アプローチやK J法を用いることはできないかと考えた。これらは心理臨床実践のグループ研究では、治田ら (2003) がK J法、岩崎・青木 (2003) が修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いる等、既に活用されている。

グラウンデッド・セオリー (Grounded Theory) はアメリカの社会学者であるGlaser & Strauss (1967/1996), K J法は日本の文化人類学者である川喜田 (1967) によって提唱された研究アプローチである。木下 (1999) によれば、この両者はデータとの密着性を強調し、そこから理論を生成する具体的方法を提示している点で親近性をもつ。そして、相違点としては、グラウンデッド・セオリーは、データ収集と分析を並行させていくのに対して、K J法ではそれらが分離されていることをあげている。援助構造内での「過程記述型事例研究」では、データ収集と分析が分離されているK J法の方が汎用性が高いと考えられる。

そこで、今回の研究では、「過程記述型事例研究」にK J法を取り入れ、分析過程について明示する。また、その分析の際には、時間軸を残した形で行う。

### 2. 対象：日本の模索型モラトリアム青年のアイデンティティ確立過程

アイデンティティ研究において重要な一領域を占めているものに、アイデンティティ・ステータス (identity status) がある。アイデンティ

ティ・ステイタスとは、アイデンティティ達成の程度であり、この先駆となったのがMarcia (1966) である。この研究では、職業とイデオロギーの領域に関する半構造化面接を行い、危機 (crisis) と積極的関与 (commitment) の有無によって、アイデンティティ・ステイタスをアイデンティティ達成、モラトリアム (moratorium)、早期完了 (foreclosure)、アイデンティティ拡散の4つに分類した。このアイデンティティ・ステイタスによって、時間的展望のあり方 (都筑, 1993) や対人的関係性の特徴 (石谷, 1994) が異なる等の報告がされている。また、現在、アイデンティティ・ステイタスは固定されたものではなく、プロセスとしてとらえられるようになってきている (杉村, 2002)。

アイデンティティを視点においた「過程記述型事例研究」を行う際にも、このような発達心理学における知見は重要であり、援助開始時にどのようなアイデンティティ・ステイタスにあったかを明らかにしておく必要があると考えられる。既に、杉原 (2001) では、アイデンティティ・ステイタスが早期完了型であることを示して事例報告を行っている。

以上から、今回の事例のアイデンティティ・ステイタスを明らかにしておきたい。詳しくは後述することになるが、この事例では「心の中の時が止まってしまっている」「自分がわからない」等と自己不確定感を訴えていた。そして、「僕は誰?」「自分って何?」等とアイデンティティの問いを繰り返し発し、その不確かさを克服しようとしていった。

先のMarcia (1966) では、危機の最中にあり、かつ積極的に関与をしようとしている状態がモラトリアムと定義されている。しかし、その後日本においては、小此木 (1978) が、これと異なる全能感や無意欲・しらけ等を特徴とした日本青年のモラトリアム心理を提示した。これらを整理し、大学生のモラトリアムの下位分類 (「回避」「拡散」「延期」「模索」) を行ったのが、下山 (1992) である。それらと照らし合わせて考えると、この事例はMarciaのモラトリアム、

つまり模索型のモラトリアム状態にあると考えられた。

### 3. 援助方法：「絵本表現法」

Gendlin (1996/1998,1999) は、フォーカシング指向心理療法を提唱し、さまざまな心理療法の流派を統合する視点を示した。そのなかで、これらをつなぐかなめとして重視しているのがフェルトセンス (a felt sense)、つまり、“(意識と無意識の) 境界領域にある、最初ははっきりしないけれど直接的に感じられるからだの感じ” である。

このようなフォーカシング指向の新しい表現法として、春日 (2002) は「絵本表現法」を開発した。これは、「フェルトセンスの描画である」「1次過程 (描画)、2次過程 (物語・詩)、3次過程 (製本) を経て、絵本として作品化する」という特色をもつものである。春日 (2005) では、この「絵本表現法」が女子大学生のアイデンティティ確立に及ぼす効果について検討した。その結果、対照群よりも「絵本表現法」群の方が、「自己斉一性・連続性」が有意に上昇し、「対自的同一性」が高くなる傾向が示された。しかし、この研究は約2カ月という短期間での実施であったため、アイデンティティの確立過程についてまでは検討することができなかった。

やまだ (2002) は、ナラティブ研究者が区別してきた論理実証モード (paradigmatic mode) と物語モード (narrative mode) に加え、“広義の物語モードを、言語モード (狭義の物語モード) によるものと、図像モードによるものに区別すべきだ” と述べている。そして、“言語による語り方と、図像による語り方は異質” であると指摘している。

これまでのアイデンティティの確立 (形成) 過程に関する研究について、これらのモードの視点から見ると、Jung (1987) 等があるものの、図像モードによる研究が大変少ない。今回、援助方法として用いる「絵本表現法」では、まず、描画という図像モード、後にそれに詩や物語をつけるという言語モードでの活動を行う。つまり、この両モードからアイデンティティの確立

過程について検討することができる。

以上のように、本研究は「過程記述型事例研究」であり、a) 対象：日本における模索型モラトリアム男子青年、b) 援助方法：図像モードと言語モードでの活動を行う「絵本表現法」、c) 分析方法：時間軸を枠組として残した形で、絵本をK J法によって分析する。

## Ⅱ 目的

日本における模索型モラトリアム男子青年に対して「絵本表現法」を実施し、その絵本をK J法によって分析し、アイデンティティの確立過程の特徴について明らかにする。

## Ⅲ 方法

### 1. 対象者

Cさん（男、22歳）。父、母、弟2人の5人家族で、現在は一人暮らしである。

### 2. 「絵本表現法」の実施方法

1) 期間：X年4月～X+2年2月

2) 実施形態：自己成長を目的としたクローズドグループで、大学内で週1回もたれた。1年目（X年4月～X+1年2月）は各回2時間半、参加者は前半9名、後半15名であった。2年目（X+1年4月～X+2年2月）は各回1時間半、9名で実施した。メンバーは、1年目前半は学生と筆者、その他の時期には卒業生や社会人も加わった。筆者は描画等を一緒にしながら、グループ・リーダーとしての役割をとった。

3) 手続き：基本的には、1, 2年目共に以下のように進めた。

〔描画〕（4月～12月）：各回は、フリートーク（今の気分等を語る）、リラクセーション、フェルトセンスの描画、シェアリングと進める。

〔詩・物語〕（冬休み）：自宅で、描きためた絵から絵本に使用する絵を取捨選択し、順番を決めて、詩や物語をつける。

〔製本〕（1月～2月）：手作り絵本として完成させる。

〔絵本発表会〕（2月）：最終回に、絵本の発表会を行う。

### 3. 分析方法

絵本ごとにK J法（川喜田、1967）で分析する。具体的には、まず、絵本につけられた文章をほぼ一文ごとにカードに書き出し（ただし、一文の中に異なる意味が含まれる場合は分割、続く文が同じ意味合いの場合は統合した）、それぞれのカードに見出しをつける。そして、グループ編成を行い、図解する。

## Ⅳ 結果

### 1. 各絵本のK J法による分析結果と経過

1年目22回、2年目17回、計39回上記グループに参加し、98枚の絵で7冊の絵本を完成させた。以下に、各絵本の分析結果と経過について述べる。ただし、1年目の『BEST COLOR OF MY MIND』は、2冊の絵本製作後に残った絵をまとめた補足的なものであったため、分析から除外した。なお、文中の〈 〉は、図中に見出しとして用いられているものである。

1) 『精神宇宙史—桃龍物語—』（描画：X年4～7月）

この絵本は12枚の絵で構成されている。それを図解したものが、図1である。〈幽閉された怪物〉→〈桃龍〉→〈銀河〉→〈左眼〉となり、そこから〈発芽〉し、「新しい歴史が動き出した」。この過程において、幽閉状態や水の星との衝突といった危機を脱出する際に、他と接触し、力をためる〈手〉、観察する〈眼〉が重要な役割を果たした。

この時期は、感情が鈍麻していることや、自信喪失感、自責感、他者への羨望が語られ、自己不確定感に悩む様子が見られた。しかし、「感情が動き始め」たり、「冷静に考え始めたら、だんだん色々見えてきて、ゆっくりだけど動き出せた」といった変化も生じてきた。

2) 『DARK SIDE—止められた心の時—』（描画：X年9～12月）

24枚の絵のほとんどが黒一色で描かれ、ストーリーがない点が、特徴としてあげられる。この絵本では、図2に示したように〈不確かな自己〉が表現された。それによると、〈無感情〉→〈変革願望〉→〈否定的感情〉→〈逃避願望〉という悪循環が起こっている。また、感情の次

元で〈無感情〉と〈否定的感情〉、願望の次元で〈変革願望〉と〈逃避願望〉間で揺らぎが生じていることが示された。

この時期についてCさんは、「自分は『闇の世界の人』だという自覚」が生まれ、それを認め、表現することで「心の中が整理されてきた」と述べている。そして、グループ内や日常生活では、不自然な賑やかさが消え、素の姿でいるよ

うになってきた。

### 3) 『MY SELF』（描画：X+1年4～7月）

12枚の絵から成り、主たるキャラクターとして葉っぱが登場している。これを図解したものが図3である。『DARK SIDE』から続くアイデンティティの探索が行われ、紆余曲折はあったものの〈自我境界の確立〉が果たされた。そして、「自分は何者であるか、もうどうでもいい」「自分の意思で飛んでいけば、そのうち見つかるだろう」という〈結論〉に達し、これ以降〈アイデンティティの問い〉が発せられることはなくなった。

日常生活では、新年度になり、学業、就職活動、ボランティア活動に熱心に取り組み、前向きな姿が目立った。一時、元恋人から非難され、苦しい思いをしたが、周囲の人たちに暖かく支えられ、それを越えていくことができた。

### 4) 『GROWTH』（描画：X+1年9～10月）

22枚の絵で構成されており、それを図4に図解した。まず、〈領域〉は〈青い空〉→〈闇の世界〉→〈闇と光の世界の狭間〉→〈光の世界〉と移っていき、最後に再び「闇の世界へ飛び去った」。このように〈闇の世界〉と〈光の世界〉の統合が果たされた。次に〈主人公〉を見ると、〈赤い物体〉→〈緑怪獣〉→〈新生緑怪獣〉と変遷し、二度にわたる死と再生が生じた。そして、この過程では他からさまざまな〈危機的作用〉と〈救出的作用〉がもたらされ、〈心情〉が豊かに描写されていた。

この時期、現実生活では二つの試練に直面した。一つ目は、元恋人と再びトラブルが生じたことである。それが描画における〈闇の世界へ落下〉した時期である。二つ目は、難関の就職試験で1次試験に合格し、自信を得たものの、2次試験に失敗した。これが、〈暗闇で光を放つ試験に敗れる〉時期である。このような試練を〈大きな手〉に救われたり、〈ひまわり〉に癒されたり等、周囲の人や新しい恋人の助力を得ながら乗り越えた。

これらを通して、Cさんには大きな変化が見られた。第一は、元恋人との関係の清算や新しい恋人との関係作りといった「異性関係の再構

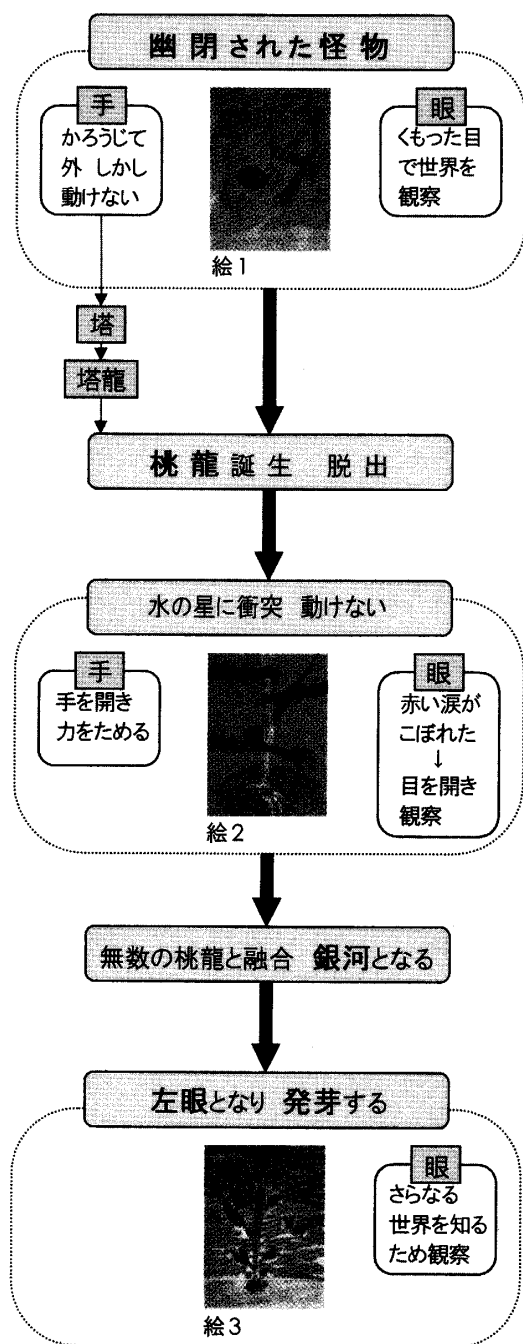


図1 絵本『精神宇宙史』

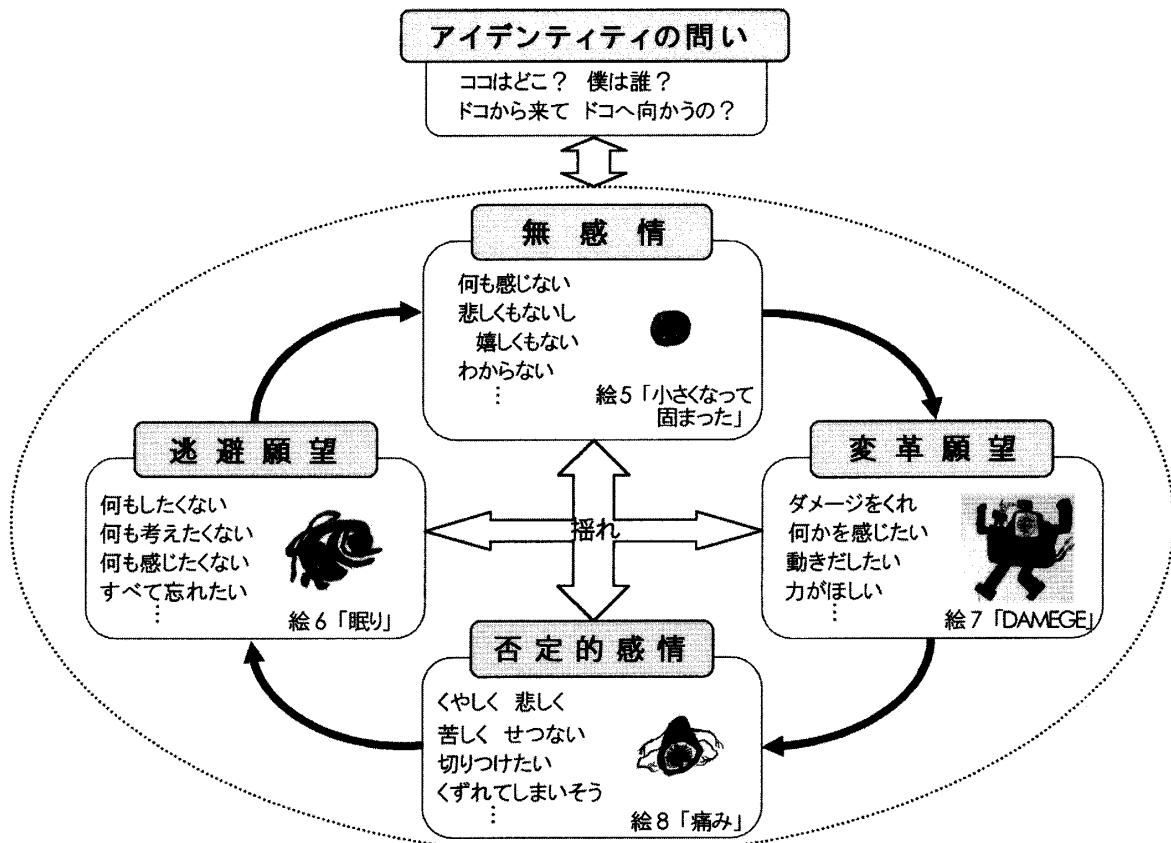


図2 不確かな自己（絵本『DARK SIDE』）

築」，第二は，社会人の先輩である父や祖父を見直し，「父性との関係修復」が行われた。第三としては，将来の目標が明確になり，再挑戦する決意をし，「社会人となる覚悟」ができた。さらに第四には，家族や恋人，友人，教師，ボランティア活動先の子どもたち等と，「安定した人間関係の広がり」が見られた。

5) 『The moon』（描画：X+1年11～12月）

Cさんは，これまでピンク色の月を時々登場させていた。その月をテーマに8枚の絵を描いた。この絵本は，図5のように〈目覚め〉→〈武装〉→〈武装解除〉→〈脱力〉→〈終焉〉といった単純なストーリー展開となっている。そして，これについて，Cさんは後に，「心の中の一つの時代が一区切りするような悲しさだったのかもしれない」「私を見守っていた，監視していた月は，必要なくなったのだと思う」と

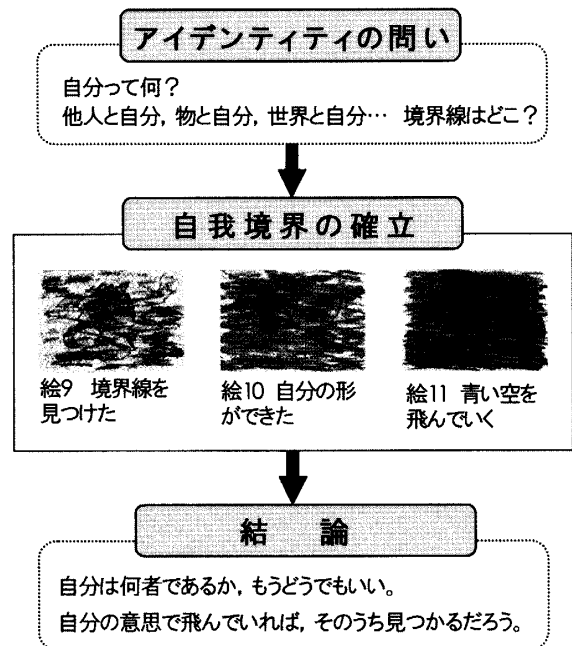


図3 絵本『MY SELF』

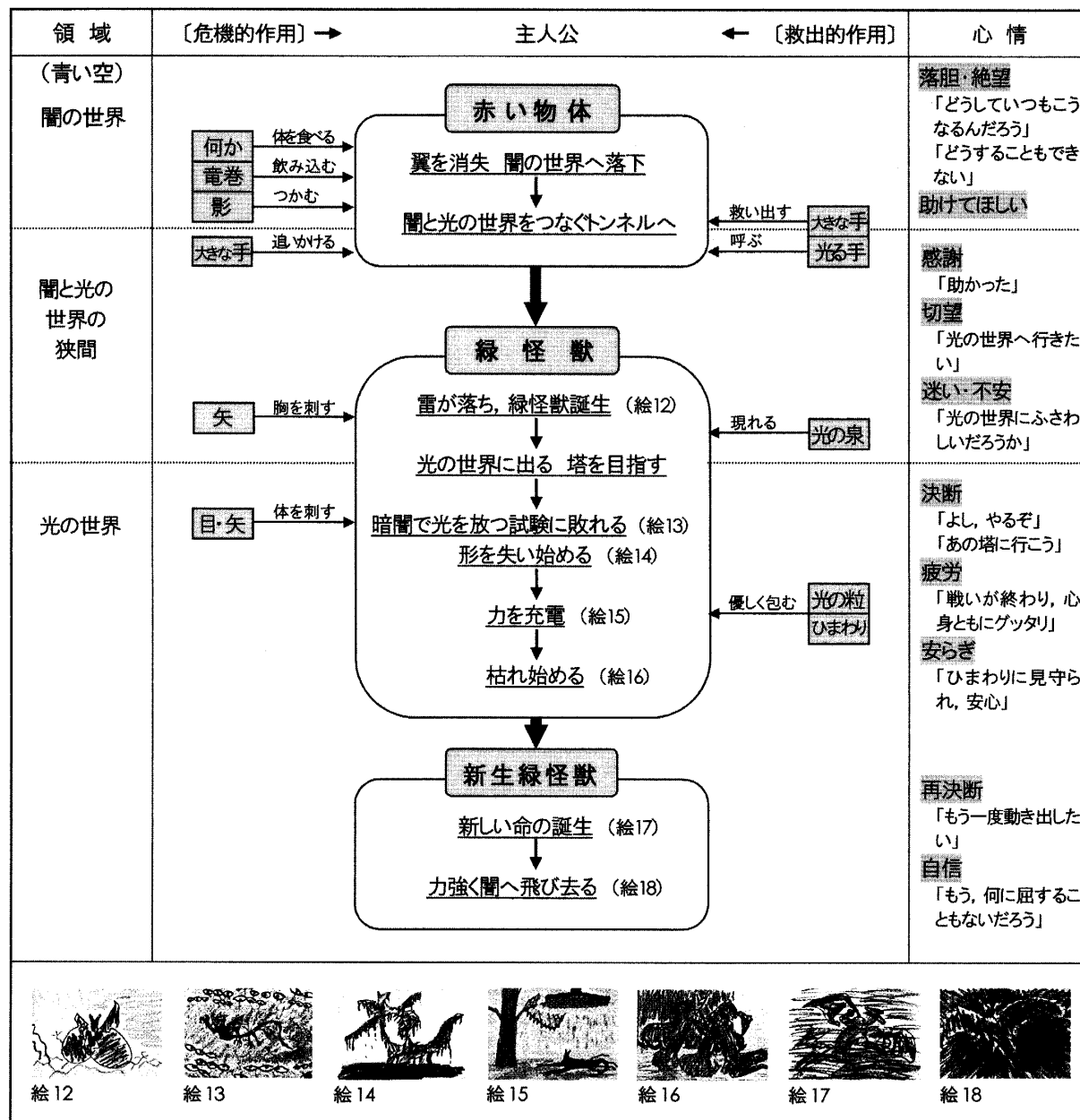
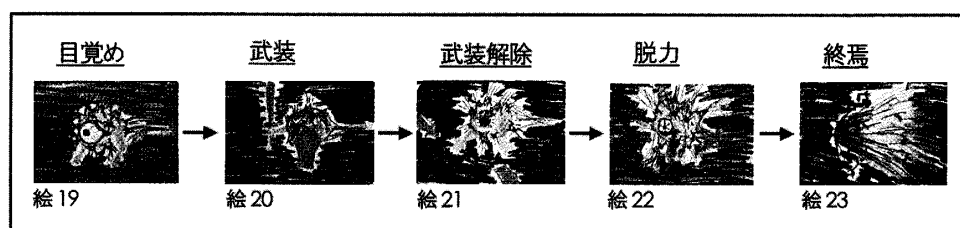


図 4 絵本『GROWTH』



絵 24 絵本  
『POTI'S STORY』

図 5 絵本『The moon』

述べていた。

日常生活では、友人との若干のトラブルはあったものの安定した時期であった。

6)『POTIS STORY』(描画：X+2年1～2月)

この絵本は、自宅で5枚の絵を描いて作られたものである(絵24)。犬が主人公で、文は犬語で書かれ、それに日本語訳がつけられたユーモラスなものだった。枚数も少なかったため図解していないが、鎖に繋がれて窮屈な生活をしてきた犬が、〈家出決行〉する話である。この絵本については、絵本発表会で「親とのこと」と述べていた。

最後の発表会で2年間を振り返り、「就職も決まった。去年は卒業だったけど卒業できなかった。ようやく一区切りついて、そっち(社会)へ向かえる」と語っており、親からも大学からも自立の時を迎えた。

## 2. 「眼」と「手」の機能

Cさんの絵本では、『精神宇宙史』(図1)の絵1, 2, 3, 『DARK SIDE』(図2)の絵8, 『The moon』(図5)等, 23枚の絵に眼や手の強調が見られた。また、前述したように『精神宇宙史』では、眼と手が危機状態から脱出する際に重要な役割を果たした。そこで、これらの眼や手の機能についてKJ法で分析し、図6に示した。それによると、第一は〈能動〉的に何かを「する」、〈受動〉的に「される」という軸、第二は、付与されている意味またはイメージが〈肯定〉的、〈否定〉的の軸が見出された。

## V 考察

### 1. 模索型モラトリアムの苦悩

模索型モラトリアム状態にあったCさんが、最初に描いた絵が「心の宇宙に幽閉された怪物」(図1-絵1)である。そして、この絵には「かろうじて腕だけは外に出すことができた。しかし、動くことさえできなかった」という言葉がつけられている。このように外(社会)とのつながりを求めながらも、身動きができずに苦悩している様子が示された。

さらに、この内的状態を端的に示しているの

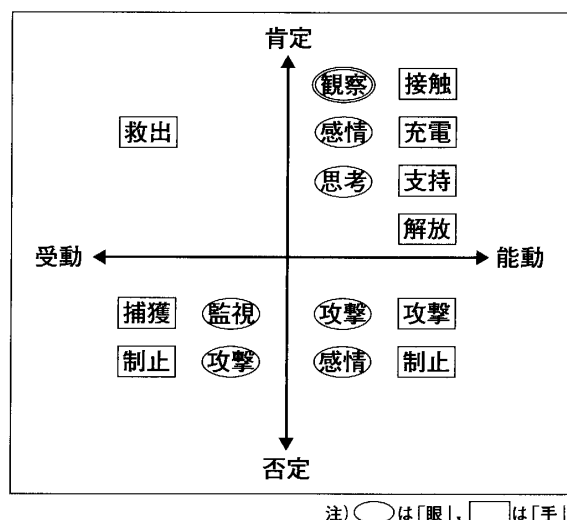


図6 「眼」と「手」の機能

が図2である。それによると、〈無感情〉→〈変革願望〉→〈否定的感情〉→〈逃避願望〉という悪循環が生じている。わかりやすく言えば、「感じないから刺激がほしいし、変わりたい。けれど、そうすると辛い。だから、何もしたくない、考えたくない。でもそれだと感じないし、自分がわからない…」という堂々巡りに陥っている。また、見方を変えると、〈感情〉と〈願望〉の2軸上での揺らぎ、つまり、「感じない」⇔「辛い」、「変わりたい」⇔「逃げたい」と行きつ戻りつしている。

石谷(1994)も、“「モラトリアム」群は自己形成における危機体験を最も顕著に示している”“接近と回避(拒否)の両価的な葛藤を強く感じている”と述べている。模索型モラトリアムでは、模索しているが故に悪循環と揺らぎのなかで苦悩していると推察される。

### 2. アイデンティティの確立過程

上記のように、『精神宇宙史』(図1)と『DARK SIDE』(図2)では、模索型モラトリアムの苦悩が示されていた。そして、特に『DARK SIDE』では、不確かな自己や心の闇が集中して表現された。Cさん自身も「自分は『闇の世界の人』だという自覚」が生まれ、それを認め、表現することで「心の中が整理されてきた」と述べている。このように、自分の不確かさや否定的側面を表現しながら「不確かな自己の許容」が行われた。

次に『MY SELF』（図3）では、「他人と自分、物と自分、世界と自分…境界線はどこ？」と問い、自我境界の問題に取り組んでいる。その経過を見ると、「かろうじて見つけた境界線」（絵9）では、背景も自分も同じ赤と黄色で描かれ、境も曖昧である。それが次第に分化し、絵10では葉っぱとなって「自分の形ができた」。そして、「自分は何者であるか、もうどうでもいい」「自分の意思で飛んでいけば、そのうち見つかるだろう」という〈結論〉に達し、これ以降〈アイデンティティの問い〉が発せられることはなかった。

このように「自我境界の確立」が果たされた。これがCさんにとって、大きな転機となったと考えられる。これ以前の『精神宇宙史』『DARK SIDE』の描画期では、「うつろ」「自分がなくなりそう」等と外界からの侵襲に怯える姿が見られた。それが、自分は何者であるか明確に言語化されたわけではないが、自他の境界が確立されたことで、このような訴えはなくなり、ある程度の安心感と安定感がもたらされた。

さらに、『MY SELF』（図3）の続きを見ていきたい。最終ページでは「僕は青い空を飛んでいく」（絵11）と書かれているものの、飛ぶ主体は描かれていない。それが、続く『GROWTH』（図4）では、赤い物体が主体として登場し、さらに明確な形をもった緑怪物が誕生する（絵12）。そして、『The moon』（図5）では一貫したキャラクターが見られ、『POTI'S STORY』（絵24）では、犬という現実的な生物が主人公となる。このように、次第に主体がはっきりとした形をもち、明確な意思をもって自律的に行動する姿が目立つようになった。

Erikson（1959/1973）は、発達の第Ⅱ段階（幼児前期）の心理・社会的危機として“自律性対恥、疑惑”をあげている。谷（1997）の調査研究では、この自律性がアイデンティティ危機および対人恐怖的心性に影響を与えていることが明らかとなり、“日本人青年において第Ⅱ段階を根底とする力動的関係が際だつ”と述べられている。また、鑑（2002）は、自律性の質的差異について検討し、欧米では“能動的自律

性”であるのに対して、日本では“受動的自律性”であり、そのため“より一層強調された恥の感覚、疑惑の感覚、自意識の拡大が助長される”と指摘している。このように自律性を区分してCさんの経過を見ると、自己実現していく力とも言える「能動的自律性の形成」が行われたのだと考えられる。

また、Cさんの絵本には、闇と光のテーマが繰り返し登場する。『DARK SIDE』（図2）では、「自分は闇の世界の人」「皆がいる明るい所に行けない」と述べ、「闇＝自分」「光＝皆」であり、〈闇の世界〉と〈光の世界〉は分断されていた。それが、『GROWTH』（図4）では、〈青い空〉→〈闇の世界〉→〈闇と光の世界の狭間〉→〈光の世界〉という移行が見られ、さらに、再び〈闇の世界〉に力強く飛んでいった。この〈闇の世界〉と〈光の世界〉の統合を経て、『The moon』（図5）では、自ら武装解除をした。このように闇と光は分断されたものではなく、闇も光もある社会の中で、闇と光の両面をもつ人間として、自分らしく生きていく自信、言い換えるなら「有能感の獲得」を遂げた。

以上のように、「絵本表現法」を通して、「不確かな自己の許容」「自我境界の確立」「能動的自律性の形成」「有能感の獲得」を達成していった。Erikson（1959/1973）は、青年期のアイデンティティに至るまでの心理的形成過程として、“基本的信頼対不信”“自律性対恥、疑惑”“積極性対罪悪感”“生産性対劣等感”をあげている。模索型モラトリアム状態にあったCさんの場合には、乳児期の基本的信頼感は大きな問題とはならなかった。しかし、幼児期に該当する「自我境界の確立」「能動的自律性の形成」、学童期の「有能感の獲得」と、発達課題をもう一度、より深化させた形で達成し直すことが求められた。

そして、これらの過程において「自我境界の確立」が大きな転機となった。谷（1997）や鑑（2002）の指摘のように、日本は関係性が強調される文化的特質をもつ。そのため、「自我境界の確立」が持ち越されたまま青年期に入りやすいのではないかと考えられる。それ故、他か



らの侵襲に怯え、“アイデンティティ危機に対人恐怖的心性が生じる”(谷, 1997)のだと思われる。これらからも、「自我境界の確立」が、日本の模索型モラトリアム青年のアイデンティティ確立にとって重要なステップとなることが示唆される。

### 3. 「眼」と「手」の機能とアイデンティティの確立

Cさんは、絵本の中で多くの眼と手を描いている。そこで、最後に、これらの機能とアイデンティティ確立との関連について検討したい。

#### 1) 「眼」の機能：分離・対象化

徳田(1992)は、眼の表現が精神医学領域の作品の中に比較的高い頻度で現れ、“思考・感情・意思などの表出としても、欠くべからざる要素”をもち、“深く関心を払うべきものである”と指摘している。今回の報告においても、図6に示したように、眼はさまざまな機能をもつことが明らかになった。また、〈肯定〉〈能動〉機能に分類された眼が、『精神宇宙史』において危機脱出の際に重要な役割を果たしたことが示された。しかも、最後には銀河が左眼となり、発芽し、「新しい歴史が動き出した」と、成長の基盤となっている。

これまで眼に注目した研究としては、細野(1985)や林・諸治(2000)等がある。これらにおいて、“眼とは、侵襲的・脅威的なものであると同時に保護的なものでもあった”(林・諸治, 2000)、“「見られる—知られる—あばかれる」といった否定的意味をもつ一方、無意識的母性への呑み込みから自らを守り、主体性を確立する肯定的な自我機能のイメージを含んでいる”(細野, 1985)と述べられている。今回の事例からも、〈肯定〉的な眼は〈受動〉〈否定〉的な眼の侵襲からの守りとなり、心理的成長への基盤となるのだと考えられる。

さらに、この〈肯定〉的な眼の中でも、青年期におけるアイデンティティ確立の問題に直面していたCさんの場合には、〈観察〉がとりわけ多く見られた。Cさんは繰り返し観察する眼を描きながら、生じている現象や自分のおかれた世界を意識的かつ冷静に見つめ、自他を分離・

対象化する客観性や主体性を培っていったと考えられる。

#### 2) 「手」の機能：親密・実体化

眼と同様に、手も『精神宇宙史』において危機脱出の際に重要な役割を果たしたり、手→塔→塔龍→桃龍と成長の基盤となったりした。そして、これらの手にもさまざまな機能が備わっていた(図6)。そのなかで最も多く見られたのが〈接触〉である。

前述の細野(1985)においても、眼だけではなく、手を強調した絵が見られ、眼と手の相互連関を通して対人恐怖症者の身体像の回復が行われたことが指摘されている。「何も感じない」「自分がわからない」といった現実感のなさに悩まされていたCさんも、この〈接触〉する手を描きながら身体感覚や現実感覚を取り戻し、他者や外界とのつながりを回復していったのだと考えられる。

#### 3) 「眼」と「手」の連結：分離化と親密化の連関

Cさんの絵本では、眼と手が強調されていただけではなく、『精神宇宙史』(図1)の絵2、『DARK SIDE』(図2)の絵8、『The moon』(図6)のように、眼と手が連結した独特なキャラクターが登場する。先に述べたように、眼は観察し、対象と距離をおく「分離・対象化」機能をもつのに対し、手は触れ、対象との距離をなくしてつながる「親密・実体化」機能をもつ。このような相反する機能が連結されて描かれている。

西川(1993)は、大学生を対象とした調査研究によって、“一体性と分離性という対立原理の統合が自我同一性の確立に重要な意味をもつ”ことを示した。近年、この研究を含め、“アイデンティティ発達概念を、個体化の次元のみでなく、関係性の文脈からとらえ直そうとする”研究が増加し、両者の統合が重要視されている(岡本, 2002)。

描画という象徴的なレベルにおいても、眼と手、すなわち「分離・対象化」と「親密・実体化」機能が、アイデンティティ確立への中心的な役割を果たし、また、それらの連関が重要で

あることが示された。

## VI まとめ

本研究では、模索型モラトリウム青年に「絵本表現法」を1年10カ月にわたって実施した。そして、その絵本をKJ法によって分析し、アイデンティティの確立過程について検討した。

その結果、以下の点が明らかになった。a) 模索型モラトリウム青年は、〈感情〉と〈願望〉の2軸における悪循環と揺らぎが生じ、強く苦悩している。b) アイデンティティ確立過程においては、「不確かな自己の許容」「自我境界の確立」「能動的自律性の形成」「有能感の獲得」が生じ、発達課題をもう一度、より深化させた形で達成し直すことが求められた。c) アイデンティティ危機に対人恐怖的心性が伴いやすい日本では、「自我境界の確立」が重要な転機となることが示唆された。d) 描画では、多くの眼と手が描かれた。そのなかでも、〈観察〉する眼のもつ「親密・実体化」機能、〈接触〉する手のもつ「分離・対象化」機能、そしてその連関が、アイデンティティ確立に重要な役割を果たしていた。

このように象徴的レベルでの心理的発達が生じた。そして、同時に現実生活では、「異性関係の再構築」「父性との関係修復」「社会人となる覚悟」「安定した人間関係の広がり」が見られ、社会人となって旅立った。

鑑（2002）は、アイデンティティについて、“他者と多くのものを共有しながらも、自分が埋没してしまわない何ものかをもち、それを経験的に確信していること”と述べている。Cさんは、このようなアイデンティティの確立をとりあえず果たしたと考えられる。

## 文 献

- Erikson, E.H. (1959) *Identity and the Life Cycle*. International University Press. 小此木啓吾（訳編）（1973）自我同一性 誠信書房
- Gendlin, E.T. (1996) *Focusing-oriented Psychotherapy*. New York: Guilford Press. 村瀬孝雄・池見陽・日笠摩子（監訳）（1998,1999）フォーカシング指向心理療法（上）（下） 金剛出版
- Glaser, B. & Strauss, A.L. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Chicago: Aldine Publishing. 武藤隆・大出春江・清水節夫（訳）（1996）データ対話型理論の発見 新曜社
- 治田哲之・岸良範・中根淑子・名尾典子（2003）ファンタジーグループにおける体験の内容とリピーターに表れる変化の縦断的研究 箱庭療法学研究, 16 (1), 21-36.
- 林美朗・諸治隆嗣（2000）特異な眼を描き続けたある精神分裂病患者（画家）の表現精神病理 日本芸術療学会誌, 31 (1), 32-39.
- 細野純子（1985）対人恐怖症者の身体像回復における〈眼〉の象徴的意味について 心理臨床学研究, 3 (1), 6-17.
- 石谷真一（1994）男子大学生における同一性形成と対人的関係性 教育心理学研究, 42 (2), 118-128.
- 岩崎光太郎・青木聡（2003）ファンタジーグループ体験における自-他領域の分離と融和のプロセス 箱庭療法学研究, 16 (2), 3-14.
- Jung, M. (1987) Feminine imagery and a young woman's search for identity. *The Art in Psychotherapy*, 14, 121-133.
- 春日菜穂美（2002）「絵本表現法」のクローズドグループでの試み 心理臨床学研究, 20 (5), 430-442.
- 春日菜穂美（2005）女子大学生における「絵本表現法」のアイデンティティ確立に及ぼす効果 盛岡大学紀要, 22, 149-158.
- 川喜田二郎（1967）発想法 中公新書
- 木下康仁（1999）グラウンデッド・セオリー・アプローチ 弘文堂
- Marcia, J.E. (1966) Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 西川隆蔵（1993）大学生における自己の2面性の研究 学生相談研究, 14, 1-10.
- 能智正博（2001）質的研究 下山晴彦・丹野義彦（編）講座臨床心理学2 臨床心理学研究 東京大学出版会 41-60.
- 岡本祐子（2002）日本におけるアイデンティティ研究の展望 鐘幹八郎・岡本祐子・宮下一博（編）ア

- アイデンティティ研究の展望Ⅵ ナカニシヤ 279-305.
- 小此木啓吾 (1978) モラトリアム人間の時代 中央公論社
- 下山晴彦 (1992) 大学生のモラトリアムの下位分類の研究 教育心理学研究, 40 (2), 121-129.
- 下山晴彦 (2001) 事例研究 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 2 臨床心理学研究 東京大学出版会 61-81.
- 杉原保史 (2001) 過剰適応的な青年におけるアイデンティティ発達過程への理解と援助について 心理臨床学研究, 19 (3), 266-277.
- 杉村和美 (2002) アイデンティティ・ステータスに関する研究 鏑幹八郎・岡本祐子・宮下一博 (編)

- アイデンティティ研究の展望Ⅵ ナカニシヤ 79-94.
- 谷冬彦 (1997) 青年期における自我同一性と対人恐怖心性 教育心理学研究, 45 (3), 254-262.
- 鏑幹八郎 (2002) アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版
- 徳田良仁 (1992) イメージの表現世界13 眼のイメージ表現〈1〉 中外医薬, 45 (3), 163-168.
- 都筑学 (1993) 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41 (1), 40-48.
- やまだようこ (2002) フィールド現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス 質的心理学研究, 1, 107-128.